FOOTSTEPS OF THE HAWK

鷹の羽音

アンドリュー・ヴァクス

佐々田雅子/訳

鷹の羽音

アンドリュー・ヴァクス
佐々田雅子訳

Hayakawa Novels

訳者略歴　立教大学文学部英米文学科卒，英米文学翻訳家　訳書『フラッド』『赤毛のストレーガ』『ブルー・ベル』『凶手』アンドリュー・ヴァクス，『深夜の囁き』『離婚をめぐるラブ・ストーリー』『運命の墜落』スティーヴン・グリーンリーフ，『ヘビトンボの季節に自殺した五人姉妹』ジェフリー・ユージェニデス（以上早川書房刊）他多数

鷹の羽音

1997年1月20日　初版印刷
1997年1月31日　初版発行

著　者　アンドリュー・ヴァクス
訳　者　佐々田雅子
発行者　早　川　浩

発行所　株式会社　早川書房
東京都千代田区神田多町2—2
電話　03－3252－3111（大代表）
振替　00160－3－47799

印刷所　株式会社亨有堂印刷所
製本所　大口製本印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります
ISBN4-15-208027-2 C0097
Printed and bound in Japan
乱丁・落丁本は小社制作部宛お送り下さい。
送料小社負担にてお取りかえいたします。

1845円

鷹の羽音

日本語版翻訳権独占
早　川　書　房
© 1997 Hayakawa Publishing, Inc.

FOOTSTEPS OF THE HAWK

by

Andrew Vachss

Copyright © 1995 by
Andrew Vachss

Translated by

Masako Sasada

First published 1997 in Japan by
Hayakawa Publishing, Inc.
This book is published in Japan by
arrangement with
Alfred A. Knopf, Inc.
through The English Agency (Japan) Ltd.

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ベイビイ・ボーイ・Eへ……

おまえは最終ラウンド、ずっと死神に勝っていた。
それなのに、ジャッジどもにごまかされた。
またしても。

だが、もう八百長はない、小さな戦士よ。
今こそ——ようやく——戦うときがきた。

〈謝辞〉

秘密の子どもたちすべてを解放しようと
自分のためでない戦いに立った義勇兵
アラン・グラントに

おれの商売では、商談に最後にくるやつは、用が済んだあと、そのまま取り残されることがある。

冷蔵庫の白い色に塗られたレンジローヴァーが、駐車場に使われているアスファルト敷きに散らばったコンクリートの破片をかわしながらやってきた。大枚はたいたぜいたくな四輪駆動だ――この前、一緒に商売してからあと、ソーンダーズは大金をかせいだとみえる。そのでかい車はゆっくり進んできて、桟橋が始まるあたりでいったん停まった。そして、バックして、今は無人の建物に尻を向けた。

双眼鏡の焦点を運転席のドアに合わせると、男が降りてくるのが見えた。ソーンダーズに間違いない。しゃれたサファリスーツを着て、ぴかぴかの黒いブーツをはいている。助手席のドアが開いた。もう一人、男が降りてきた。中背で、体つきの割に顔が丸っこい。迷彩服にコンバットブーツという恰好だ。メタルフレーム、ミラーレンズのサングラスで目を隠している。おれは頑丈な大梁のてっぺんから黒く染めた縄梯子をつたって下りていった。扉のほうに歩いていくうちに、梯子は影の中に溶けこんで見えなくなった。

午後の盛りの日ざしは強かったが、使われなくなった倉庫の内部の残骸に当たってばらばらに砕け散っていた――こちらからは薄汚れたハドソン川からジャージイの波止場までの風景がずっと見渡せた。扉がさっと開いて、二人が中に入ってきた。

「バーク」ソーンダーズが手を差し出した。「久しぶりだな」

「商売の話じゃなかったのか」おれはいった。

「あいかわらずだな」ソーンダーズは苦笑して手を下ろした……だが、その手はこちらの視野のうちに置いていた。

「これが話しておいた男だ。ロジャー・クライン」

「アイルランドのCl（クライ）ineで、ユダ公のKl（クライ）einじゃねえからな」男はそういった。口もとは笑っていたが、目はミラーレンズにさえぎられて見えなかった。「おれたちのほしいものはソーンダーズから聞いてるな？」

「ああ」おれはいった。「火器だな」

「重火器だよ、あんた」男はいった。「どうにかなるのか？」

「もちろん」おれはいった。それは嘘ではなかった――あちこちで軍事基地が閉鎖されているので、最近ではそれくらいのことは朝飯前になっている。
「おれたちがほしいのは――」
「あんた、おつとめしたことはあるのか？」おれはさえぎって訊いた。
「なんだって？」
「おつとめしたことはあるのか？」ミラーレンズに映ったおれの像を見ながら、繰り返して訊いた。
男は援軍を求めるように、ちらっと右のほうを向いたが、ソーンダーズは肩をすくめただけだった。そして、体重を外側の足に心もち移しかえ、その身振りで自分の考えを伝えた。
男はおれのほうを振り向いた。「ああ、ちょっとばかりくらいこんでた」甲高い声の底に敵意が感じられた。「それが、どうした？」男はサングラスを外して、おれをにらんだ。それを一連の動作でやった――たぶん、家で稽古するときはもっとうまくやれるのだろう。
「どうした、じゃない」おれはいった。「どうして、と訊いてるんだ？」
「そんなこと訊いてどうなる？」男は訊いてきた。
「自分が取引する相手のことは心得ておきたいからな」おれは冷静な口調でいった。
「あのな、おれはあんたの娘とデートさせてくれっていってるんじゃねえぞ」
「勝手にしろ」おれはいった。
男は十五秒ほど黙りこんで、おれをにらみ倒そうとした――せいぜい頑張ってみろと受け流した。そのあと、男は短く刈りこんだ茶色の髪を掌で撫でつけ、ちょっとの間、下唇を噛みしめてからいった。「武装強盗だ」
おれは事情がのみこめたというようにうなずいた。「独りでパクられたのか？」続けて訊いた。
「うん？」
「ムショへ入ったとき、相棒も一緒だったのか？」
「いや。相棒なんていなかったからな」
おれはまたわかったというようにうなずいた。「なるほどな」男にいった。「どういうものが手に入るか調べてみよう。三、四週間かかる。そのかわり、保証金はいらない」
「あんたはすぐにやれるって話じゃ――」
「何がだ？　塀を乗り越えて、ブツを盗んでくるのがか？　いいか、現実的に考えろよ。おれには中に仲間がいるんだ――特別なブツをパクってくる手はそれしかない。何を売り物にするかは、やつが何を手に入れるかによる。そうい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

うことになってるんだ。どういう話を聞いてるか知らないが、それが実際のところだ。ずっとそれでやってるんだ。わかったか？」
「ああ。だけど……」男は語尾を濁して、ソーンダーズのほうを見た。
「ちょっとわたしに話をさせてくれないか」ソーンダーズがいった。「ほんのちょっとだけ一対一で。な？　いいだろ」
おれはうなずいた。
「外で待っててくれないか」ソーンダーズは男にいった。
「ほら、キイだ」
アイルランドのクラインは何かいいかけたが、思いなおしてやめた。ソーンダーズからキイを受け取ると、かしいだ戸口を通って外に出ていった。
「今のはどういうことだったんだ、パーク？」ソーンダーズが訊いてきた。
「あいつはにせものだ」おれはいった。「インチキ野郎だ」
「どうしてわかる？」
「武装強盗でくらいこんだなんていいかたは誰もしない――そんなのは役所かなんかのいいかただ。ふつうは盗みでとか、泥棒でとかいうもんだ。盗みに入るとなりゃ、当然、武器を持ってくからな――ほかにやりようがあるか？　それに、相棒のことを訊いたときのあいつの顔を見たか？　相棒なんていなかっただと――それだけのことをやって誰もいなかったっていうのか」
「だったら、あいつの素性をどう見てるんだ？」
「そうだな、できそこないのナチスか、今週はなんて名乗ってるか知らんが、そういう類の一味だろう。といっても、白人部族の戦士なんてもんじゃない――ろくでなしの助平野郎だ。くらいこんだときには、大勢チクってるに決まってる」
「だから？」
「だから、あいつは信用できないってことだ。それはあんたも承知だし、おれも承知のうえだ」
「だが、あいつのカネだって、カネはカネだ。ちゃんとつかえるぞ」
「あんたはもういくらかせしめたんだろう」おれはいった。
「あのな、わたしは――」
「まあ、いいって」おれはいった。「あんたは武器の注文を受けたら、自分でおれに掛け合えばよかったんだ――前にも商売してるんだからな。それから、値札をつけかえて、あの間抜けにじかに売りつけりゃよかったんだ。おれには知らせるまでもなかった」

「わたしは――」
「だが、あんたはこの取引の中心にはすわるまいとした。そうだろ？　ということは、二つのうちの一つだ。あいつがあまりカネにならないと踏んでるか、あいつにびびってるかだ」
「わたしはびびっちゃいない」ソーンダーズはいった。詐欺師らしい平静な声だったが、ややむっとした口調だった。
「この顔合わせのお膳立てに、あいつはいくら払った？」
「五千だ」
「半分はおれのもんだな」
「どうしてそう思う？」
「おれはあいつとは商売してないし、あんたともしてない。あんたは顔合わせのお膳立てだけであいつから五千ぼった。あとで、おれがしくじったってあいつにいうんだろ。だが、あいつがおれに腹を立てることはない――おれはあいつのカネを取ったわけじゃないからな。それで、あんたはこれならヤバいことにはならないと思った……ほんの何時間かの仕事にしちゃ、けっこうなあがりってわけだ」
「あれがあがりっていうんなら、わたしのあがりだ」ソーンダーズはいった。
「あんた、おれのことを八〇〇番とでも思ってるのか？　フリーダイヤルの？」
「あんたには正直なところをいったんだ、バーク。まあ、そう気を悪くしないでくれ。千でどうだ？」
「あんたは五千っていったが、あいつは万出したんじゃないか。二千よこせば、オーケイだ。あんたもおれもな」
「いやだといったら？」
「さあ、どうなるかな」おれは穏やかにいった。
ソーンダーズはサファリジャケットのサイドポケットに手を入れた。ゆっくりと、二本の指だけを。そして、煙草のパックを引っ張りだした。それをおれのほうに差し出し、一本勧めた。
「結構だ」おれはいった。「吸わないんでな」
「この前会ったときは吸ってたじゃないか」
「この前会ったときは、本気で商売してたからだ」
「ふーん……」ソーンダーズは煙草に火をつけながら考えた。「よし。わたしは気を悪くしてほしくないんだ。あんたのいう二千を出そうじゃないか。ただし、それにある情報をつけたすっていうのはどうだ？　値打ちのある情報を。あんたにはその値打ち分払ってもらう。それでどうだ？」
「聞こうじゃないか」
ソーンダーズは間合いを詰めて、声をひそめた。「わたしはずっと市外で仕事をしてた。あんたもそこで何か仕事をしてたと聞いてる。コネティカットでな」

おれは顔色を変えず、先を待った。
「おまわりがあんたを追いかけてる、バーク。婦人警官だ。その女はそこらじゅう嗅ぎまわってる」
「それがサツの仕事だろう」
「気にならんのか？」
「ならないな。おれは地元のサツをわずらわすようなことは何もしていない」
「よし。まあ、いいだろう。古い友だちのよしみでいっただけだ」
「おぼえておこう」おれはそういって、開いた手を差し出し、カネを要求した。

サングラス野郎が独りで刑務所にいったことなどあるはずもなかった。おれにはあった――それも一度ならず。だが、おれは商談に独りでいくことはない。音なしマックスが影の外へ下りてきた。縄梯子など見向きもせず、暗い水面に降り注ぐ月光のようにふわりと床に着地した。
マックスはおれの相棒だ。ソーンダーズと話している最中、おれが煙草に火をつけていたら、卵の上に鉄床が落ちてくるように、マックスがやつに襲いかかっていただろう。

おれはソーンダーズがよこした札束のうち七百五十をポケットに入れ、同じ額をマックスに渡した。残りの五百はおれたちの銀行にいくことになる。
マックスはたしかに受け取ったというしるしにうなずいた。レンジローヴァーが走り去る音が聞こえた。マックスはおれより先に動きだしていた――マックスには音は聞こえない。だが、古い桟橋の腐った板の上をでかい車が走る振動を、おれが感じる以上に強く感じているのだろう。マックスは倉庫の扉まで滑るように進んで、外をうかがった。
マックスがもう一度うなずくのを見て、おれはあとについて表に出た。
おれの古いプリマスはウェスト・ストリートの反対側に停めてあった。いつもと変わらない様子だった――そこにうっちゃられているように見えた。ロックを外して、二人で乗りこんだ。
エンジンをかけ、走りだした。行く先は銀行だった。

おれたちはまず表側を流してみた。窓に白い竜のタペストリイがかけてあった――危険なしのしるしだ。おれはレストランの裏の小路に車を停めた。のっぺらぼうな薄汚い

灰色の壁を切り取るように、ペンキで真っ白な四角が描かれていた。その四角の中にマックスが走り書きした細かな黒い筆跡が目をひいていた。漢字を読めなくても、何が書いてあるかはわかる。駐車禁止。常時。

おれたちが近づいていくと、レストランの裏の鋼鉄のドアが開いた。ずんぐりした中国人が戸口に立っていた。白いシェフのエプロンをつけ、片手に肉を切る斧を持っている。誰がきたのか見届けると、脇へ退いて、おれたちを中へ入れた。背後でドアがバタンと閉まる音がした。

おれたちは厨房を抜け、一列に並んだ公衆電話の脇を通って店の中へ入った。そして、奥のほうのおれのブースに腰を落ちつけた。

ママが自分の持ち場のレジを離れて、おれたちのテーブルにやってきた。途中、広東語で何かがみがみ怒鳴った。ウェイターはママのずっと先のほうにいた――いったん姿を消したかと思うと、酸辣湯の入った大きな壺を持ってあらわれた。

ママは立ったままで、まず、マックスとおれにスープをよそってくれた。それから、マックスの隣に座ると、玉じゃくしで自分の碗にもついだ。マックスもおれもお義理で一口すすって、暗黙のうちに求められている感謝の身振りをした。

「おれたち――」おれが口を開いた。

「スープ飲んでからだよ」ママがいった。

わかった。おれたちは自分の碗のスープを飲み干して、おかわりを待った。二杯目には揚げた麺を混ぜて、前よりもゆっくりとかたづけた。ウェイターがやってきて、碗を下げ、かわりに青いガラスの灰皿を置いていった。

「それで？」ママが尋ねた。

おれはママに五百ドルを渡した。「銀行に入れといてくれ」おれはいった。

「二人の分かい？」ママが訊いてきた。

おれはうなずいた。ママはそのカネをさっとどこかに隠した。マックスとおれはママの銀行にそれぞれ二百ドルの預金をすることになる――残りの二十パーセントはママの手数料だ。あがりとしてはあまりにささやかでいちいち数えてみるほどのものでもなかった――おれたちはママに敬意を表して一任することにした。

「あの女、また電話してきたよ」ママがいった。

それが誰のことかはすぐわかった。ソーンダーズがいっていたのと同じ婦人警官だ。ベリンダ・ロバーツ。以前、セントラルパークで会ったとき、自分からそう名乗った。おれは目くらましにパンジイを連れて、仕事の下調べとお膳立てをしている最中だった。ベリンダはジョギングをし

ていた。筋肉質で曲線の美しい体と赤茶色のぼさぼさの髪をしたいい女だった。ベリンダはおれの犬が気に入ったといった。おれのことも気に入ったといった。おれに番号を教えて、電話をくれといった。

おれは一度も電話しなかった。だが、ベリンダとはまた会った。前と同じ場所にいた。ベリンダが警官ではないかといったのはクラレンスだった。ベリンダは公園で仕事をしていたのだ。強姦犯人を捕まえようと囮捜査をしていたのかもしれないし、麻薬取引を見張っていたのかもしれない。あるいは、おれを追っていたのかもしれない。それは知りようがなかった。

知りようがなかった……彼はいないか、とベリンダがこのレストランに電話してくるまでは。バークはいないか、と。おれはベリンダに本名をいったことはなかった。番号を教えたこともなかった。

嘘つきのベリンダ。しつこい女だ。だが、何が狙いにしても、おれより先にくたびれてしまうはずだ――なにしろ、おれは耐えることにかけては先生並み、待つことにかけては禅師並みなのだから。

マックスが拳をぐるぐる動かし、頭を左右に振るしぐさをした――スタンスをはかっているボクサーだ。そして、何か問うようにおれを見た。

おれは首を振り、腕時計をとんとん叩いた。まだ早すぎる。

「何かいい投資の話かい、バーク？」ママが尋ねた。

プロフの最新の合法的なもうけ話のことを、マックスがママに話したらしい。プロフはサウスブロンクスの改造した倉庫でボクサーを訓練していた。おれの望みは、おれたちのカネを全部つぎこんで、競走馬を買うことだった――おれは前から自分のトロッター（繋駕競馬用に訓練された馬）がほしくてしょうがなかった。だが、重罪で有罪判決を受けたものは競走馬を所有することはできない――当局は競馬というゲームにうさんくさい人間が割って入ることを望まないのだ。連中は幅広く経歴を調べ、写真や指紋、確かめられる限りの関連項目といったものをチェックする。競走馬を所有するにはそれだけのことが課せられていた――保育園を開こうと思っても、経歴だのなんだのを問われることはないのに。

「それがよくわからないんだ、ママ」おれは正直に答えた。

「おれはその子のことを見てるわけじゃないし」

「プロフはたいへんなカネになるっていってるよ」ママは

いった。黒い目がカネへの執念の炎で燃えたっていた。
「あんたは投資するのかい？」
「ああ。プロフに五千召しあげられた」
「マックスもかい？」
「ああ」
「なんでわたしに訊かないの？」
「これは博打だからね、ママ」口ぶりにほんのかすかな皮肉も混じらないよう気をつけていった。
「博打じゃないよ、バーク。投資だよ、そうだろ？」
「ママがそういうならそうかな」
「そうだよ！　五千でいくらぐらい見返りがあるんだい？」
「それはまだ訊いてなかったな」
ママはチッと舌打ちした。それから、振り向いて、肩越しにウェイターに何かいいつけた。ウェイターはお辞儀をして、姿を消した。再びあらわれたときには、使い古した灰色の金属の箱を持っていた。ママは箱の蓋を開けると、中を見もしないで手を突っ込んだ。そして、抜き出した百ドル札の束をおれに渡した。
「五千」ママはいった。「あんたやマックスと同じだけの見返りをもらうからね、いいね？」
おれはうなずいた。手触りだけでカネを勘定するママの能力にはいつもながら恐れ入ってしまう。

マックスと死ぬまで続くジンラミーのゲームをまた何十番かやった。ママはいつもにもまして元気で、マックスに大声でアドヴァイスしつづけ、あっと驚くような馬鹿な失敗をしでかしたときなどは後頭部をピシャリとひっぱたいた。マックスは叩かれても素知らぬ顔をしていたが、ママのアドヴァイスに従ってゲームを進めた。おかげで、おれは昼までにまた三百ドルほど勝った。そのうち、おれが両手でハンドルを握るしぐさをすると、マックスは顔をほころばせた――お出かけの時間だ。
おれたちはFDRドライヴにのってトライボロ橋を渡り、ブルックナー・ブールヴァードへ出て、なにごともなく進むうちに、目的のブロックに着いた。そこにはブロンクスでよく見られる焼け跡や、焼けてから時間がたってすっかり炭化してしまったようなビルが点々と散らばっていた。倉庫は通りからやや引っ込んだ位置に建っていた。通りとの間には、昔、トラックの荷積みに使っていたコンクリート舗装の駐車帯があった。おれはそこに停まって降りると、車の警戒システムを作動させた。おれのプリマスはとても

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.